

新島得夫さんのこと

河野仁昭

社友の新島得夫さんに最初にお目にかかったのは、『同志社百年史』の編纂中であった。総長を訪問された新島さんを、今後お世話にならねばならぬかもしれないからと、総長の上野直蔵先生ご紹介くださったのである。新島さんは明治三十年七月八日、新島襄の義理甥である公義さんの長男として、当時、公義さん一家が借りておられた下鴨の社家で生まれた。小学校三年生のとき公義さんの仕事の関係で東京へ移り、東京商工学校に学んだあと、昭和二十五年に定年退職されるまで三菱銀行につとめられ、その後、日本マタイ株式会社に再就職されて常務取締役の要職につかれた。同社を退職なさったのは、四十五年五月だから、私がお目にかかったころには、東京都大田区上池台のご自宅で、悠々と余生を送っておられたのである。

たしか二度目にお目にかかったとき、総長室で新島襄の手帖のほか二点ほど、遺品をご寄贈いただいた。新島の全集の編集にとりかかりたいので、もし収録できそうなものがあったらお借りしたいと、最初お目にかかったときお願いしておいたのである。手帖は新島が二度目に外遊したとき、ポストンなどで用

いた英文のメモ帖であった。

「お役に立つかどうか、探してみました。こんなものしか見当りませんでした。ほかにもう何もありません」

新島さんはそう言われた。お願いした本人はもう忘れていたのに、新島さんは憶えていて探して下さったのであった。

同志社へ来られると、新島さんは必ず若王子墓地へ墓参された。「もう年だから、いつまでお参りできるかわからんです」と、その度にいわれた。八十歳代の半ばに達したご老体には、若王子の坂道はけわしすぎる。庶務の職員が私がお供したが、新島さんは人の手助けをかうとはされなかった。よろけたり、つまずいたりして私たちをほらはらせながら断固としてお一人で登り下りされた。

ある年、「私が元気なうちに息子に教えておかないとやらんから」と、ご子息の公一さんを伴ってこられた。新島さんは公一さんの手さえかろうとされず、「頑固でしょ、万事これです」と、公一さんは私をふり向いて苦笑された。

新島さんはまるで小学生にでもものを教えるように、「これが曾祖父(民造)さん、これ

が曾祖母(登美)さん、これがお爺(公義)さん、これが八重婆さん」と、それぞれの墓石の前に立って公一さんに教えられた。新島家の墓守りは新島家のつとめだぞというおもいが、ありありと感じられる教え方であった。同志社の墓地管理の仕方について干渉がましいことはひとことも言われず、ただ黙々と、自分なりに先祖を守るといふ姿勢であった。

新島襄墓碑の剝落が碑銘の一部にまで及ぶ状態になり、その保存修理を検討する委員会が設けられたのは、一九八二年九月であった。上野総長が委員長で、新島さんも当然ながら委員になられた。しかし、新島さんは終始、同志社の意向に従うという姿勢で一貫され、ご自身の意見をのべるということもあまりなさらなかった。遠距離の上にご高齢でもあったから、委員会は欠席がちであった。

本誌七十五号(一九八三年十月)のインタビューで、銀座の同志社事務所でお話を聞いたことがある。どんな不躰な質問にも、新島さんは嫌な顔をなさらずに、記憶を探りさぐり率直に心えて下さった。飾り気のない寡黙な方であった。

新島さんが最後に若王子山へ登られたの

は、一九八七年一月十六日午前十一時から、墓地で新島襄先生墓碑再建除幕式がおこなわれたときである。そのとき九十歳であったから、長時間立っておられるのが困難で、折疊式の小さい椅子を用意して、それに掛けておられた。掛けたまま新しい墓碑を仰ぐように見上げられて、

「立派だなア。こんなに立派なものにしていただけるとは、思わなかったなア」

と、眩くように繰り返しいわれた。その言葉には、先祖の一人である襄先生(と私たちには「先生」)づけて呼ばれるのが常であった)が、同志社からこのようにしてもらえて、という思いがこめられていると、私は感じた。

新島さんはラットランドから石材を取り寄せることや、どういう姿の墓碑にするかも、再建委員会で承知しておられたのであったが、それが出来上ってみると予想以上に大きく、そして立派だと思われたらしい。新島さんが再建された墓碑に満足され、それが若王子墓地の見納めになったことに、私は幾分のやすらぎを覚えるのである。

(本部社史資料室室長)

高橋源次先生のことども

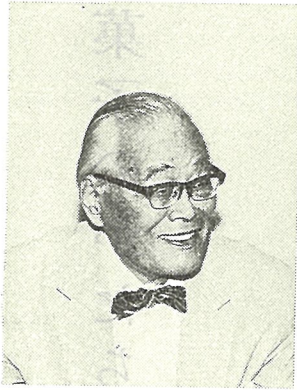
北 垣 宗 治

去年の五月、東京新宿のホテルで開かれた
研究社主催のパーティの席で、偶然高橋先生
にお目にかかった。同志社大学英文学科の大
先輩で、八十八歳になられる先生が、なおお
元氣そのものであることを見届けたので、こ
れは『同志社時報』のインタビュールーム
にご登場頂くべき最適任者であると直感し、
帰途後すぐに係に連絡した。その結果「同志
社の英語教育——高橋源次先生（明治学院大
学元学長）に聞く」と題して河野仁昭さんに
よるインタビュールームが実現し、『時報』83号を
飾ることになった。ところが、それから一年
もたたない今年の二月六日に先生が急逝され
るとは、あの日の元氣なお姿からして全く予
想もつかぬことだった。享年八十九であった。

高橋先生が同志社時代の恩師と仰いでおら
れた吉岡義陸先生に、私もまた英作文、シェ
クスピア講読、ゴールズワージー等を習った
し、大学院では高橋先生のもう一人の恩師石
田憲次先生に『ハムレット』講読を担当して
頂いた。それ故先生と私は年齢の上で三十年
の開きがあってもなお「同時代人」というこ
とになる。先生は浜田与助、園頼三教授にも
習われたそうだが、私の助手、講師の頃、両

教授はご健在で、文学部教授会で同席させて
頂いていた。しかし他方、ロムバード、グロ
ーバーの両宣教師や、厨川白村、有島武郎と
いった先生に習われたと聞くと、とたんに先
生の時代がもう一時代昔にさかのぼるとい
うような錯覚におちいる。人間の主観のたより
なさを痛感する次第である。

先生のエッセイ集『生命の色』は自伝的要
素の濃い作品であるが、それによると一九一
八年から一九二三年にかけての同志社学生時
代は特に輝かしい時期に思われる。それに当
時は英文学科の黄金時代だった、といえそう
である。それは先生より六年後に卒業の上野
直藏先生が、ご自分の大学時代をきわめて色
あせた時代として語られたことと対照的だか
らである。高橋先生の意識からすれば、その
後長年にわたり京都大学の英文科を牛耳って
こられた石田憲次先生は元来同志社の先生な
のであり、石田先生の基本的な業績は同志社
時代に培われたもので、それが認められて京
大に呼ばれた、ということである。また当時
は学生数も少く、京大、同志社ともに、英文
科の学生は厨川、ロムバード、石田といった
共通の先生方から英文学を学んでいたとい



う。

私が感銘を受ける今一つの点は、当時の教授たちが英語の実用面でも傑出していたことである。京大の厨川教授はESSの学生を前にして、「バイロンを読め、ブラウニングを読め」と英語で演説した。同志社の海老名弾正総長は高橋先生の願いを入れて、彦根高商のESSの学生を前にして、ガウンと角帽をつけて英語演説を試み、国際主義の必要を力説した。たしかに上野直藏先生もいざとなれば英語で演説する方であったが、学生であった私には先生の英語演説は驚異に値する光景だった。けれども高橋先生からすれば、それは同志社人として当り前のことだったのである。

高橋先生は彦根高商で二十一年間教えたのち明治学院に招かれ、のちには明治学院大学長として活躍された。その間全国の中学、高校の英語教育振興に尽力し、全国英語教育団体連合(全英連)の会長をつとめられた。これは実質的には高橋先生が組織された団体である。その上、英語教育協議会(EEEC)の専務理事として活躍された。私は二十年前の或る日、東京で先生にお目にかかった時、先生からくわしくEEECの研修所の中の最新

の器具を備えたLL教室等をご案内頂いたことがある。日本の英語教育界の第一線で指導している大先輩の姿をたのもしく、力強く感じずにはいられなかった。今、その高橋源次の英語の出発点が、母校同志社にあったことをあらためて思い出すのである。河野さんのインタビューに答えて、高橋先生が強調された次の言葉を今一度かみしめてみたい。

「同志社英文学科の伝統というものは、英語を本当の意味でマスターするところにあるわけだ。小説にしたらって、ドラマにしたらって、詩にしたらって、論説にしたらって、すべて英語でもって大きな声で朗読でき、英語で書き、話すことができ、英語で思想の表現ができるのでなきゃ、本当にわかる、鑑賞し研究することができるとはいえないわけだからね。……英語で意見交換ができる、ということ。それが同志社英語教育の真髄です。そういう英語をマスターしていないことには、文学の鑑賞も研究もないわけだから。それが厨川先生のお考えであったし、石田先生、吉岡先生のお考えであり、同志社英語教育のあり方だった。」(『同志社時報』83号60頁)

(大学文学部教授)